

『年下ワンコとリーマンさん』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

「初めて相手の手料理を食べたときに運命を感じたんだって。押しつけられた料理が不(ま)味(ず)かったら最悪だ……とまで思っていたそうだ。手料理は大事だよなあ。というか、手料理を押しつけるってよほど腕に自信がある人だったんだろな。俺はそういうのは……ちょっとダメ」

貴道は、家族か正式な料理人が作った物でないと食べない。子どもの頃からそういうところはとても神経質だった。

政道は「そうだったな」と言って昔を思い出す。

「イカと里芋の煮物が旨くて、もの凄くびっくりしたんだって。そういや、マサ兄の煮物も旨かったよなあ。母さんから習ったんだっけ？」

「いや、母さんと一緒に祖父さんから習ったんだ。一番上手いのは祖父さん。……で、一つ質問だが、相談者のモデルは男か？ 女か？」

「男。たしかね、ヨシくんと同じ年。大学二年生だって」

「そうか。でもまあ……つき合っている相手がいるだけ凄くないか」

「それがどうも、友だち以上恋人未満という関係らしい」

曖昧な関係は、政道は好きではないが、最後の一步を踏み出す勇気がなかなか出ないのも分かる。

「あー……それは大変そうだ。俺はガンバレとしか言えないな」

「相手は年上なんだって。今日の朝に最後の撮影が終わって、そのときに『今日から積極的に頑張る』って気合い入れながら帰ったんだけど……今頃どうしてるかな」

貴道は「ごちそうさま」と言って、マグカップを持って立ち上がり、キッチンに向かう。

「まさか、な」

なんとなく、どことなく、遼太に当てはまる点がいくつかあるが、遼太だという証拠はない。ただの、偶然の一致だ。

政道は複雑な表情を浮かべ、遼太の顔を思い出す。

「ところでさ、俺の会社が関わった雑誌の名前がメモしてあるのはなんで？ あと、この集合写真は、いつ見ても構われてるヨシくんが笑えるよね」

「あのな、偶然だと思うんだが……絶対に偶然だと思うんだが」

政道はそう前置きして、じっと弟を見つめた。

「ん？ ああ、そう言えばね！ その子もゲームが得意なんだよ！ ほら、マサ兄がヨシくんと一緒に遊んでたゲーム。ええとストハンだっけ？ あれを休憩時間にずっとやってた」

「名前は行峯遼太じゃないか？」

今度は貴道が目を丸くして黙った。

そして、次の瞬間「あれはもしやマサ兄のことを相談していたのか！」と大声を出し、両手を顔で覆って寝転んだ。

「世間は狭いな……。遼太なら隣の部屋にいるぞ。言いたいことがあるなら言ってこ

い」

「いやもう……俺は一体何をしてたんだ。マサ兄はストレートだったのに……行峯君をけしかけてしまった」

「俺には今のところ事件は起きていないから心配するな。いやしかしなあ……」

遼太の真の顔を知らなければ「俺はずっと気づかないふりをしよう」と心に誓えただろうが、憧れの目を目(ま)の当たりにしてしまった後では、知らんぷりはきっとできない。

貴道。兄さんはもしかしたら……もしかするかもしれないが……万が一のときはよろしく頼む。

最悪の事態を想定しておく、いざそうなったときの対処はスムーズだ……と思いつつも、遼太とそういう仲になることは果たして最悪なのか？ と己にさり気なく突っ込みを入れる。そんなとき、とても良いタイミングでSNSの着信音が鳴った。相手は遼太だった。

ゲーム端末と袋菓子を持って政道の部屋を訪れた遼太は、玄関で貴道と会って「うわっ！」と声を上げた。

「……なんで沢野さんがいるんだ？」

「沢野政道は俺の兄だからな」

「それは知ってる。沢野さんは工作中、いつも『俺の兄は』ってブラコンを爆発させてるじゃないか」

遼太の言葉で職場でのブラコン振りを暴露された貴道は、「弟が兄を好きで何が悪い」と開き直る。

「とにかくこっちに来て座れ」

政道は笑いたいのを堪えて、弟と遼太をこたつに手招きした。

「……いきなりクライマックス的な何かを感じるんだけど」

政道の左横に腰を下ろした遼太は、表情の見えない顔で呟く。

「俺のミスでもあるんだけどね、行峯君……。君が想っている相手の名前と性別を先に聞いておけば良かったと思うよ」

貴道の言葉に、遼太は「やっぱりなー」と肩を竦める。

「で、どこでどんな風に俺の名前が出てきたんですかね」

「すまん。俺がピンと来てしまった」

「政道さんかよー。じゃあ話は早いじゃないか。俺と結婚してください」

話が早すぎて光の彼方(かなた)だ。

「そうじゃないだろう？ まずは、俺とつき合ってくれますか……だろ？ 相手はストレートなんだぞ？ 遠回しに遠回しに言わないと、大変なことになるんだ」

貴道は遼太を指導するが、すでに政道の心の中は大騒ぎだ。

やっぱりそうきたか。今の今まで、ごく普通の友人づき合い(ご近所づき合い含む)だったから、実感が湧かないんだが。これはどうしたらいいんだ？ というか、ここで俺に返事をしろと？

政道は生まれて初めて女子に告白したときよりも焦(あせ)っていた。

「俺は自分のペースで、政道さんと恋愛がしたかったんだけどな。全部バレちゃったのか」

「話の流れが恋愛だったから、ついそうなったんだと思う。だが貴道は、いつも口が軽

い男じゃないということは、俺が保証する。今回のことは、俺に思い当たる節が山ほどあったから君の名前が出たんだ」

弟を弁護しなければ……と必死になっていたが、遼太が勢いよく眼鏡を外したので、政道は慌(あわ)てて顔を背(そむ)けた。

憧れの切れ長の目に見られるのはいい、だが自分も見つめ返すとなると話は別だ。気恥ずかしくてきつと転げ回る。

「そうか！ 政道さんに思い当たる節がたくさんあったということは……俺が告白する前から、あなたは俺を意識していたということか。なるほど。結婚してください」

「こら」

ここで貴道が割って入った。

「だからどうしてそう、ムードのない台詞(せりふ)が出てくるんだ？」

「最終的にはそうなるんだし」

「男同士は養子縁組だ」

「そうか。じゃあ政道さん、俺を養子にしてください」

ちょっと待てお前ら。

政道は「冷静になれ」と言って、テーブルを拳(こぶし)で軽く叩いた。

「俺はストレートで、男を恋愛対象にしたことはない」

カミングアウトした弟がすぐ横にいたので、ここは丁寧に丁寧に言葉を選ばなければ。どんな言葉ならいいんだろう。恋愛用のポキャブラリーよりも、ゲームに登場するモンスターの弱点の方がたくさん覚えている。だがここでゲームを出すわけには……！

政道は脳内で最適な言葉が出て来ずに焦った。

貴道と遼太は真剣な顔で政道の言葉を待っている。ああプレッシャーだ。

「あの、な」

「急がなくてもいい、政道さん。俺の顔に慣れてからでいいから」

遼太が政道の左手を両手で掴み、その顔を近づける。

「いきなりのアップは……ちょっとやめてくれ」

弟がいる前でいきなり迫るな。兄としての沽(こ)券(けん)と矜(きょう)持(じ)を考えてくれ！ そうだとも！ 年下の、弟とも思っていた青年に迫られる俺の気持ちを考えろ！

政道は視線を逸らして「話の流れが速すぎる」と嘆いた。

「行峯君、今はそれ以上マサ兄に触らないこと」

貴道は微笑を浮かべ、政道から遼太を引き剥(は)がす。

「いやでも、俺たちが恋愛関係になれば……今以上に触りまくることに」

「今はちょっと我慢して」

「沢野さん、相談してるときに言った言葉とまったく違うんですけど。俺にもっと積極的になれって言ったじゃないか」

「……………俺の見てる前で、俺の大事な兄を襲うなど言ってるんだけど、聞こえなかったかな？ 恋人たちの営みは、二人っきりでやりなさい。ただし、合意の上でだ」

おい貴道。お前はどっちの味方なのか分からないぞ……！

物静かな弟の新たな一面を見た政道は、心の中でそっと突っ込みを入れるしかない。

本文 p50～56 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>